ありがとうと、ごめんなさい

柚乃　詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありがとうと、ごめんなさい

【Ｎコード】
Ｎ３０５２Ｒ

【作者名】
柚乃　詩音

【あらすじ】
若き王の政治により傾いてしまったとある小国。そのために起きた飢饉で両親をなくした少女、イリス。こうなってしまった復讐を胸に秘める彼女は王に使用人として近づくことに成功する。

序

涙はもう枯れ果てた。この地のみ字や緑が失われるのと一緒に。

ここは国が成り立ってまだ間もない小国だ。緑豊かで資源に恵まれた美しい土地だった。しかし今はその面影すらない。見る影も無く、なくなってしまった。それは一年という短い期間の間に。民の幸せは奪われた。

先代の王が亡命し、若き一人の皇子が王の座に付いた。それがすべての始まりだった。

彼は若かった。１６という年齢でひとつの国を治めるのは容易なことではない。彼なりにやったのだろうが国はどんどん傾いていった。

国民の不満は随分と積もっていたが、無力な民に出来ることなど無い。多くの国民が飢え、苦しみ、死んでいった。

少女――イリスの両親も例に漏れることは無かった。彼女の両親は、彼女と弟を残して息絶えた。

弟は幼い。こんな所で育つべきではない。どうにかして隣国の知人に親のつてで預かってもらうことになっている。

イリスも、といわれたが断った。イリスにはやりたいことがあった。

どうしても、どうしても――

「アノヒトヲ、絶対ニ許セナイ」

壱

「ん・・・・・・」

毎日決まった時間に目が覚める。それはもはや習慣となっていた。

今日は夢見が悪い。はっきりとは覚えていないが、何の夢を見ていたかは分かる。父と母のこと、だと思う。こういう気持ちになるのはあの日の夢を見たときだ。

両親が死んだ日。イリスは決めたのだ。

こんなことになってしまった恨みをはらす。

だから彼女はここで住み込みで働いている。チャンスをうかがうために。

ここ、というのは城のことだ。若き王――ストラトスのいる場所である。イリスはここで使用人として働いている。元々少人数の使用人しかいなかったようで簡単に受け入れてもらえた。

イリスは家事は得意であったし、容姿も割りと整っていて少し身なりを正せば身分もごまかすことが出来た。それも幸いして欧の近くで働く機械も出てきている。しかもそれが――今日だ。

野望がかなう。そう思うといつもの仕事にも俄然力が入る。

「よっし。頑張ろー！」

一人拳を握って振り上げる。

守備は上々。絶対にうまく生かせて見せる。

＋＋＋

弟を預けている人から便りが来たらしい。イリスよりも少し前から子お子で働いている一つ上のカシアが伝えてくれた。それがい話

ではないのはカシアの表情から見て取れた。

「どうしたんですか」

「……弟さんが、ご病気に……って」

その知らせはイリスの頭から先ほどの意気込みやら王に対する恨みやらを一瞬、すべて取り払った。

唯一の身内である弟の病。心配で、心配で。いまあすぐにでもトンで行きたい思いだった。

「ストラトス様が明日からしばらく休んでかまわない、と。心配だろうけれど今日休まれると困るからとも言っていました。朝一に出たらどうです」

意外といいところがある、と思った。かまわず働けといわれると思ったからだ。

少し、少しだけ決心が揺らぐのを感じた。人をあやめた後に弟に会うことに。そして、王は自分が思っているほどに私利私欲にまみれた悪逆非道な男ではないかもしれない、ということに。しかしやめるわけにはいかない。両親が死んだことは、多くの民が苦しんでいることは変わらない。

「ありがとうございます、カシアさん。今晩のうちに準備しなくちゃ」

どの道明日にはここを出るつもりだ。王がいなくなれば城でやることは無くなる。

カシアは微笑み「では仕事を始めましょうか」と先に広間に向かっていった。

広間はきらびやかに飾り付けられている。今日の酒宴の用意だ。

その場には王もいた。なにやらこだわりがあるらしく、自ら指示を出していたようだった。だが今はしゃがみこんで何かを見ているようだ。随分と一国の追うには似合わない格好である。

「カシアさん、私はなにをすればいいですか？　酒宴の用意はまだよく分からなくて」

「ごめんなさい、今手を離せないの。ストラトス様に直接言って」

みな忙しそうにせかせかと動き回っている。人数ガスk内割には

仕事が多いのだ、仕方が無い。特に今日のような日は。

しゃがみこんでいる王のところに行くと、彼はリスにえさをやっていた。しかも口元に笑いを浮かべている。

なにやら今日は王の意外な一面をよく知る日だ。知っても意味の無いことなのに。

「すみません、ストラトス様。何かやることはありませんか？」

「ん？　イリスか」

ゆっくりと立ち上がりイリスを見やる。

「そう……だな。宴の用意は慣れている奴がやった方がいいだろう。ならば……うん。付いて来い」

そういって王は歩き出した。イリスは慌てて彼の後を追って小走りで付いていく。

「あの、どこへ？」

「いいから黙って付いて来い」

長い廊下を抜け、いくつかの扉の前を抜け進む。こうしてみると当然のことながら広い。よく二十数人で成り立っているとこころから感心する。

やっとたどり着いたのは、欧の自室の近くの中庭。ここら辺は特別な用がないと近づくことも出来ない。例えば、王の呼び出しとか、そういうことが無い限り。それにはそれなりに信頼が必要だ。それに答える誠意も。

「凄く綺麗なところですね」

それが素直な感想だった。

細部まで手のかけられている美しい庭園だった。木々も、花もごちゃごちゃしていることも無くいたってシンプルなのに華やかさがある。そんな組み合わせで植えられている。

「だろう。この国も元々は……な」

その声は威厳ある王には似合わない悲しげなものだった。そのせいだろうか。イリスは「それは貴方が！」と言いそうになったのも、彼の顔を見るのもやめた。

「これらは私が育てたのだ。あの木を植えたのも、この花を咲かせたのも、土を耕したのも」

とても愛おしそうな目で自分で育てたと言うそれらを見つめている。

この人は緑が好きなのだろう。こんなにも愛おしそうな瞳で木々を見ている。こんなに美しい花を咲かせられるのだから、きっとそうだ。

王は手時かな如雨露（じょうろ）を取り言う。

「手伝ってくれるか」

「はい」

それ以外の返事は浮かばなかった。大切な場所のはずだ。そこになぜ王がイリスを連れてきたのかは分からない。だが、断ろうとは思わなかった。

弐

イリスは黙々と花や木たちの世話を始めた。随分と手際がいい。

ストラトスは気づいていた。イリスが自分に向ける恨みの念に。国内に同じような思いを持つものは何百、何千といるだろう。だが行動は取らない。この国の法はひどく独裁的で厳しいものだからだ。少しでも行動を起こせば大変な目にあう。ストラトスはそれをどうにか変えたいと思っていたのだが、古株の大臣たちがそれを許さなかった。就任してまだ間もない王は、王と言う立場であってもまだ意見する力は大臣たちのほうが強いのだ。それでも足掻いた。だがそのせいで国は大きく傾いてしまったのだ。恨まれても、憎まれても仕方がない。

――それに、この娘に殺されるのなら本望だ。

そう思っていた。イリスは仕事もでき、人当たりもいい。だから城の使用人の中でも受けがいい。そしてこの上なく優しい心の持ち主だ。王はそう確信している。そんな彼女に恨まれるようなら、死んで当然なのかもしれない。そう思うほどにストラトスはイリスの優しさを身をもって知っていた。

それは、イリスが城にやってくるほんの少し前のことだった。今だってすぐに思い出せるくらい最近のこと――

＋＋＋

ある日、ストラトスは町に下りていた。国の現状を知るためだった。しかし国民たちには、王が自分たちの生活を脅かそうとしていると思ったのかもしれない。ひどい罵声を浴びせ、あまつさえ石まで投げつけてきた。何とか立ち回って人通りの無い所に来たときにはもうくたくただった。

そこにイリスが現れたのだ。

「そこに……誰かいるんですか？」

ストラトスは一度大きく方を揺らした。

（うまく振り切ったと思ったのだが……）

また走らなければならないのかなどと思いつつ立ち上がろうとした。だが、イリスが発した言葉はまったく予想することができなか

った。

「いきあがっていますけど大丈夫ですか……ちょっと！　頬切れてるじゃないですか！！」

そういわれて初めて頬が熱を帯びているのに気が付いた。

「あ……」

「今、水と何か治療できるもの持ってくるので。そこにいてくださいね！　家近いんですぐですから！！」

そういって走り去ってから戻ってくるまで、ほんの数分しかかかっていなかった。ストラトスなんかよりも息を切らせて、言葉通り水と布を持っていた。

「こっ……これ……ハァ、お水です。手当てしますから、じっとしていてくださいね」

わたされた水をしばらく見つめていた。

今、この国で水と言ったら貴重品だ。少なくとも簡単に見知らぬ人間に譲れるようなものではない。

「いい、のか？」

そう聴くとイリスは不思議そうな顔をした。

「そのために持ってきたんですから」

変わった女だ、と思った。

＋＋＋

城にイリスが来たとき、すぐにあのときの女だと気づいた。だから、普通だったら絶対に必要な身元等を調べるのをすべてぶっ飛ばして、本当なら城の使用人なんて出来ない筈の出身の女を雇ったのだ。

今度は声に出して言う。彼女に聞こえないように。しかし、彼女に向けて。

「お前に殺されるのならかまわない

チャンスをやろう」

それからイリスに声をかける。次は聞こえるよう。

「今夜の宴の後、何か食後に作って持ってきてくれないか。菓子とかでかまわない」

イリスは不思議そうに首をかしげる。

「かまいませんけど……」

「酒宴の席じゃまともにものを食べられないからな。客に挨拶をしなければいけない。だから酒宴の後、部屋にもってこい」

ここまで言ってイリスはようやく気づいたようだ。

酒宴の後――使用人は皆片づけで忙しい。つまりイリスにとってこの上なく絶好の機会だ。

イリスは驚いた表情をした後にこりと笑う。

「分かりました。酒宴の後、ですね」

＋＋＋

もうすぐ、イリスはこの部屋にやってくる。何らかの用意をして。それまでにストラトスにはやっておきたいことがあった。

机の引き出しから羊皮紙を取り出す。一番手近にあった羽ペンをインクにつける。

チャポ、ン

静かな部屋にインクが揺れる音だけがする。

もう言葉で伝えるのには間に合わない。

一言でいい。一言、どうしても言っておかなければいけないんだ。

ペンをゆっくり走らせる。

一字一字に思いを、心を、自分の命を刻みつけるように。伝わらなくてもいい。残しておかなければ。

この一言に全てを込めて。

参

イリスはカップケーキの入った籠を持って廊下を駆ける。一瞬でも立ち止まったらば、決心が鈍りそうだった。

あの悲しそうな声、笑った顔。

浮かぶそれらを必死で振り払う。

「はぁ、はぁ……」

ストラトスの部屋の前で止まり息を整える。

大きく深呼吸をして、ノックする。

「入れ」

短い返事が返ってきた。

扉を開くとストラトスは椅子から立ち上がりイリスに近づく。

「カップケーキか。いただこう」

ストラトスがケーキを手に取る。

ごくり、とイリスの喉から生唾を飲む音がする。

「ん、うまい」

その刹那、ストラトスは時間がゆっくり流れているかのように倒れ込む。と同時にイリスの目からは涙が溢れ出ていた。

「っ――――――……」

人が目の前で死ぬと言うのはこれほど辛いものなのか？　それとも彼だから？

とめど無く溢れる涙は止まる様子は無い。

ストラトスは苦しむことも無く、一度微笑み、永遠の眠りに付いた。

ここにいる理由は、もう無い。なのに足が床に縫い付けられたかのごとく動かない。

ふと机の上にある紙切れに目が言った。

そこに書いてある文字を見る。

『ありがとう』

この言葉にどんな意味がこめられているのか、イリスに知る術(すべ)など無い。だがそれを見た直後イリスはその場に崩れ落ちた。

「ぅあ……あああああああああああ」

叫び、嗚咽を漏らしながら泣いた。

城を出なければいけないことも、ほかの使用人が起きてしまうな

んて事も、時の流れさえ忘れて。

参（後書き）

もう少しだけ続きます。

四

イリスの叫び声で、城の使用人たちは挙(こぞ)って目を覚ました。すぐにストラトスの部屋に駆けつけ、うち一人は泣き喚くイリスに肩を貸して部屋を出た。

使用人の中で、王を殺したのがイリスだと思ったものはいなかった。誰もが、イリスは王の夜食を作るように頼まれて部屋に行ったところあんな惨状の彼を見つけたものだと思っていた。

この国には死因を調べられるほどの技術は無い。ましてや、使われた薬を検出することなんて尚更だ。

使用人たちは交代でイリスの元を訪れ、各々励ましたり、声をかけたりを繰り返している。使用人たちのイリスへの信頼は厚い。それだけの人柄を持つ少女なのだ、彼女は。皆、彼女が泣いているのは心優しい少女が、人の死を目の当たりにし悲しんでいるものだと思っている。

「イリス、あんな状況を見てしまってはさぞ辛いでしょう。まだ夜は明けないわ。少し、休んだらどうかしら」

かけられる言葉は優しく彼女をいたわるものばかり。それがイリスには辛い。心苦しい。王を殺したのは私だ！そう言ってしまいた

かった。そうして罰せられることで、この罪は償うことができるだろうか。

王の部屋に行くまでも、ずっと揺らいでいた心は今も変わらない。

――これでよかったのだ。目的は遂行された。両親の敵は果たした。これで、国民は幸せになれる。

――ああ、なんてことをしてしまったんだ。あの人は最後まで、あんな優しい言葉を残していたのに。

そんな思いが体の中をぐるぐると、ぐるぐると血液と一緒に巡っていく。どうすればいいのだろう。

＋＋＋

王が死んで、数ヶ月がたった。イリスはいまだ立ち直れずにいる。

一度、弟の住む隣の国まで行った。弟の体調はそう悪いわけでは

なく、笑顔で「心配しなくていいよ、お姉ちゃんはお仕事に行っていいんだよ。僕のことは気にしなくていいんだよ」なんて言われてしまった。そんなことを言われたら、戻らないわけには行かない。大切な弟に、自分がしてしまったことを話すことはできなかった。もちろん、弟を預けている家の人にも。

帰ったところで、やることなど無い。とりあえず、仕事をやめる旨を伝えようと城に行った。それなのに、使用人たちはイリスの帰りを歓迎してくれたのだ。イリスはやるせない思いでいっぱいだった。ここで、最後のときまで働き自分の罪を忘れないようにするべきかもしれない。そう思った。この人たちの優しさの中にいれば、ずっと自分はこの人たちの主人を殺したことを忘れることは無い。それはつらいことではあるが、あんな事をした事を忘れるわけにはいかない。これが、せめてもの償いだ。そう思うことにした。

時折、王の部屋だったあの部屋に行き、一人泣く。誰にも気づかれぬようにひっそりと。

イリスが城に戻って数日後。国では内乱がおき始めた。次、この国を答辞するものを決めるためだった。だがなかなか決まらずに、国民の暮らしは以前以上に辛くなっていた。

――これは、私のせいだ。

イリスは常に思いつめていた。どうすればいい。何かできないか。

答えなど出るはずの無いそんなことばかり考えていた。

そして今だ。まだ、内乱は続いている。イリスは廃人の如くただ呆けることが多くなっていた。

そんな時考えるのは何時も同じことだ。

どうすればいいのだろう。許されてはいけないほどのことをした。自分にできることは？この罪を償うことは？誰か――誰か教えてほしい。

ふらふらと、庭を歩く。王の庭園だ。まだ、ここには美しい花々が咲いている。木々が青く茂っている。ここの手入れはずっとイリスが続けていた。理由なんて無い。この場所が朽ちていくのに耐えられなかったんだ。

庭園の中心は、少し開けたようになっている。そこに佇むイリスの様子は、前の彼女だったらば絵になる物だったはずなのに、今は痛々しいだけだ。悲しみや絶望しか感じられない。それどころか禍々しくさえ感じられるかもしれない。

少しはなれたところに、薔薇の花が咲いている。紅い薔薇。イリスはそれに近づき、素手で手折る。棘が刺さるのなんて気にしない。痛みも感じていないかのように、表情の無い、深い悲しみを宿した

ような顔で2，3本。

元いた場所に戻り、花びらを一枚一枚散らす。丁寧に、丁寧に。それを沈黙の中並べる。静寂しかない場所に、花びらが散って、イリスの手で形作られる。

それが終わったのか、今度は立ち上がり、あたりに視線をめぐらす。端のほうに揃いの白い二脚の椅子がある。その上においてある園芸鋏。それをイリスは手に取った。

庭園の中心で、鋏を両手で握りすっと背筋を伸ばし立つ。

鋏を、喉に向けて突き立てる。

――私は罪を犯した。

――許されない罪。

――許してなんていわない、いえない。

――でも、償わせてください。

――それ以外に、できることなんて無いから。

ザシュッ

紅い血が、緑の上に散る。鮮やかな紅。罪人の血も、赤いのか。
のんきにそんなことを考えた。痛みが数泊遅れて襲ってきた。

――まだ、痛みを感じる私は人なのだろうか？

――あんな事を犯してしまったのに、人でありつづけているのか？

イリスの最後のメッセージ。薔薇の花びらが伝えた言葉。それは

――

『ごめんなさい』

終

イリスの死体はすぐに見つけられた。見つけたのはカシアだった。

イリスのメッセージを理解できたものはいなかった。

ストラトスはなにを思ってあの言葉を残したんだろう。

イリスはなぜあそこまで追い詰められてしまったのだろう。

それを知るものはいない。知ることもできない。知るのは当人のみ。

メッセージを残した相手にすら伝わらなかった。

小さな国の若き王と、こころ優しき町娘。なにを思って死んでいった？

なにが伝えたかった？

どうしてこんなことになってしまったのだろう。誰のせいでもないはずなのに。

ああ王よ、

ああ娘よ、

貴方はとても優しい人でした。

終（後書き）

ついに終了です。こんなくらいだけの話を最後まで読んでくださった方々にこころからの感謝を送ります。
イリス、ストラトス、天国では幸せに過ごしてください。そう、これを読んだ友人に言われてしまいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3052r/

ありがとうと、ごめんなさい

2011年5月14日13時50分発行